

2019 年度教職研究科 FD 活動「年間まとめ」

①1 年間の取組内容

- 春・秋 Semester ごとに授業評価アンケート（「授業内容について」「授業の進め方について」「受講生の取組について」という 3 観点から 14 項目）を実施し、その結果の分析、各教員からの総括、次年度の改善点等を話し合った。
- 研究科アンケートを M1、2 ともに実施した。M1 は「教育課程について」「授業について」「学生支援について」「全体を通して」という 4 観点から 19 項目、M2 はそれに「実践探究論文」という観点を加えて 5 観点から 23 項目について問うた。この結果を分析し、カリキュラム改革に向けて改善点等を話し合った。
- 他の教職大学院への調査を実施した。調査項目と対象大学院は、「教職大学院における教科内容学と教科教育学の連繫」（島根大学、鳴門教育大学、宮崎大学）、「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」（愛媛大学、香川大学）、「発達障害児童生徒への対応に関する科目のあり方」（埼玉大学、宇都宮大学、奈良教育大学、大阪教育大学）である。調査内容は教員連絡会議において共有した。また、調査項目ごとに調査内容をもとに、来年度に実現できることを 5 回の FD 委員会で検討した。
- 春・秋 Semester に授業公開週間（6/24～28・11/11～15）を設け、教員相互の授業参観を実施した。最低 1 回は授業を見学することを義務づけた。授業担当者と参観者には「授業公開実施報告書（様式 A・B）」を書き、各自の授業を振り返った。また、この期間は学部生や外部の参観も可能にしてアンケートによって授業を評価してもらった。
- カリキュラムのあり方を検討する材料とするために、院生に「学びのポートフォリオ」を春・秋 Semester ごとに実施した。また、本年度から研究者ゼミ、実務家ゼミで「学びのポートフォリオ」の活用方法を報告するようにした。
- 修了生フォローアップ
修了生の勤務状況から本学の教員養成の成果と課題を理解することと、修了生の直面している課題や悩みに関するサポートを行うことを目的として、1 期修了生全員のフォローアップを実施した。

②取組の中で明らかになった成果と課題

○授業アンケート

アンケート結果の分析は、以下の通りである。

- ・「授業内容について」は、「やや不満であった」「不満であった」という回答が 5.7% という結果で昨年度より改善された。昨年度課題があった、理論と実践のバランスへの配慮と授業の体系性に関しては改善されている（否定的な回答 約 12%→約 6%）。
- ・教員の説明のわかりやすさ（否定的な回答 約 12%→7.7%）、TT の有効性（否定的な回答 約 30%→約 14%）と昨年より改善されている。開設 3 年目となり授業内容、授業の

進め方ともに改善が見られるようである。

- ・「受講生の取組について」については、昨年と同様に課題がある。授業外の学習時間が1時間未満の学生、授業に関連する文献を読むことをしていない学生が35%~40%程度いる。主体的に学ぶ姿勢を身につけさせる工夫が求められる。

○研究科アンケート

コロナウイルス蔓延の影響で、本年度の研究科アンケートの実施及び集計は郵送により行わざるをえなかった。そのため回収率が非常に悪く、M1の回収数は1、修了生の回収数は11であった。修了生11名の集計のみ行ったが、本来の回答数の1/3であるため、昨年度の結果との比較は困難である。

項目別にみると、「立命館大学大学院教職研究科で学んだことは、自分のためになったと思いますか」という項目の回答は良好であった(とてもためになった72,7%、まあまあためになった22,3%)。他の項目においても否定的な回答をする修了生が1~2名いるが概ね肯定的な回答が多かった。3名以上が否定的な回答をしている項目は「教育内容は教育現場における現実の課題や教育における本質的な課題を積極的に取り上げ、検討を行うようになっていますか」と「立命館大学大学院教職研究科における実習支援体制は適切でしたか」であった。

自由記述において、特に注目すべきものとして教科の専門性の欠如と、開講科目の偏りを指摘するものがあつた。これは次期カリキュラム改革においても重要な課題となるものである。

○他の教職大学院への調査

国立大学の教育学研究科から教職大学院への全面移行の動きに対応して、「教科内容学と教科教育学の連繫」をどのように図るか、現職院生の獲得のために「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」をどのように確立するのか、今後ますます求められる「発達障害児童生徒への対応に関する科目」を充実する3つの課題は、次のカリキュラム改革の重要な柱になる。そのため、この3つの課題について来年度も継続的に調査、検討、実施することになった。

○授業参観

年間1回以上の参観を義務づけている。授業アンケートの結果が改善されたことに甘えるのではなく、「主体的な学びを促す工夫」「授業における課題のあり方や発展的な学習」といった課題に対応するために、他の教員の授業に学ぶことを継続したい。

○「学びのポートフォリオ」

院生には学びの振り返りのために「学びのポートフォリオ」の提出を年間2回義務づけている。教員がこれを有効活用するために、本年度から研究者ゼミ、実務家ゼミで「学びのポートフォリオ」の活用方法を報告するようにした。活用に関する様々な工夫が交流された。

○修了生フォローアップ

修了生の勤務状況から本学の教員養成の成果と課題を理解すること、修了生の直面して

いる課題や悩みに関するサポートを行うことを目的にして、本年度から修了生のフォローアップを実施することにした。

具体的には、修了生の勤務先に赴き、管理職と本人から聞き取り調査及び面談を行う。管理職には「Ⅰ 服務全般についての印象」「Ⅱ 優れている点について」「Ⅲ 改善すべき点について」「Ⅳ 教職大学院でもっとつけておくべきだと思われることは？」の4点について聞き取りを行い、修了生評価アンケートを取った。修了生評価アンケートとは、授業力（授業構想、授業展開、授業評価）、生徒指導力（児童理解、学級経営、特別活動・部活動）、職務遂行力（意欲・態度、事務処理能力、コミュニケーション力）、省察力、連携する姿勢・力、職業倫理という6項目9要素について、当該修了生の特に優れている点、改善すべき点を調査するものである。修了生には、「Ⅰ 勤務の概況」「Ⅱ 赴任以来、とく苦勞していることは何か」「Ⅲ 日々の勤務の中で、大学院での学びが活かされていると感じることは？」「Ⅳ 教職大学院でもっと学んでおけば…、研究しておけば…よかったと感じていることは？」という4点について面談した。

本年度は本研究科1期生が現場に出た最初の年であるため、修了生全員の勤務先に赴いた。その結果、管理職は修了生の「Ⅰ 服務全般についての印象」について、良く頑張っており、真面目で誠実だという印象をもたれている。そして積極的に何事にも取り組む修了生がいる反面、失敗を恐れて積極性に欠けると評価される修了生がいた。「Ⅱ 優れている点について」は、まじめさ、堅実さ、素直さ、積極性、協調性、観察力など多岐にわたった。しかし、勤務1年ということもあり、修了生の人格的なものが多く、具体的なものは少なかった。「Ⅲ 改善すべき点について」は、積極性の欠如を指摘するものが多かった。失敗を恐れる優等生的なところがあるようである。あとは経験が必要な事柄を挙げる管理職が多かった。大学院で学んだことを実践のなかで身体化する時間が必要であろう。「Ⅳ 教職大学院でもっとつけておくべきだと思われることは？」として挙げられたものとしては、主体性、積極性が多かった。また、本学のカリキュラムで弱い特別支援教育という指摘もあった。さらに、人間力とも呼べるようなものも大学院で育てることが期待されていることもわかった。修了生評価アンケートの結果は、職務遂行力（意欲・態度、事務処理能力）と省察力、職業倫理の評価が高かった。しかし、授業力（授業評価）の評価に課題があった。

修了生の聞き取りの結果、余裕がないさ、部活動の指導、授業力の欠如、職場の人間関係など様々な悩みを抱えていることがわかった。訪問者はそれぞれに丁寧にアドバイスを与えた。「Ⅲ 日々の勤務の中で、大学院での学びが活かされていると感じることは」多くあるようで、これも多岐にわたった。「Ⅳ 教職大学院でもっと学んでおけば…、研究しておけば…よかったと感じていること」については、「教科教育、教科の専門力量」「特別支援教育」「学級経営」を挙げるものが多かった。本研究科のカリキュラム改善に活かすべき課題である。また、修了生が所属していたコース以外の事柄を指摘するものが多かった。現状の緩やかなコース制についても検討する必要があるかもしれない。

③次年度の取組内容

- ・「教科内容学と教科教育学の連繋」「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」「発達障害児童生徒への対応に関する科目」を前進させ、カリキュラム改革に反映する。
- ・外部評価委員の意見を反映した FD 活動。